

ふるさと霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第123号 (2016年8月)

風に吹かれて (101)

白井啓治

・梅雨の去って猛暑と蟬の声 熱風のなか蜥蜴走る

6月に当風の会及び劇団ことば座の10周年記念を終え一息つきたい所であったが、その後の一ヶ月の何とも慌ただしい事であったか。

7月15日の夜にメールが入る。先代の林家三平の最後の弟子であった、林家とんでん平師匠が北海道から沖縄までの全国落語行脚に出発し、7月24日に茨城県那珂市で独演会を行い、東京に入るのだが25日が開いているので石岡で一席お伺いできないかというものであった。突然過ぎて無理だと断るつもりでいたが、石岡市の野菜直売所「石岡そだち」を、当会の木村さんの奥様がオーブンさせただけだったので、そこで高座を設定することを思い付き、早速打診。

月曜日の22日快諾をもらい、大慌てにチラシを作りネットで拡散をお願いする。採れたて野菜の陳列する大きな台が三本店内を独占する場所にどう高座を作り、客席を作るかが問題であったが、とんでん平師匠には来てビックリで良いだろうと野菜の陳列台の一角を高座に仕立ててやってみようことにした。

彼は、手話落語の第一人者である事から、こと

ば座の小林を応援する聾者の人達に情報の拡散をお願いする。

急なことで集客の心配をしたが、客席数の取れない直売場が満員となる賑わいであった。観客の半数が聾者の方達で、師匠の手話落語に観客の全員が大笑いをした。この会場の高座にあがれますのは新鮮野菜ととんでん平師匠だけ、のキャッチフレーズも大いに受けた。

この落語会を決定した日である。

ギター文化館の館長木下氏から電話が入る。突然だが本日午前中をもって館長の解任命令が出たというものであった。理由は聞くことはなかったが、小生もプロダクション経営をしていたので、普段は目を瞑っていないと運営に支障が出るのと、突然の解任劇をとる手札として黙認しておく事案があるが、どうやらそれに近い事が起きたようである。

木下氏とは10年のお付き合いとなるが、発足したてのことは座の発信基地とさせてもらったのは、彼の小屋主（ホールの責任者）としての、プロデュース哲学に小生の演出家としての琴線に触れるものがあつたからであった。彼の円満勇退であるならこちらとしてもこの地に代わりを求められないホールなので継続を願うのであるが、突然の解任による交代劇であつてみれば、次の責任者のホール

運営の哲学を確認する必要もあり、翌日、当会の文庫などを展示販売させてもらっていたものをいったん引き上げに出かけた。その時に、8月に組まれていたギター文化館コンサートシリーズのことがあり、状況を尋ねると「どうしましょうか、まだ何もやっていないみたいだし」との言葉。この言葉で、小生はもうこのホールでの表現活動は中止と決めさせてもらった。ネットでコンサートお知らせの拡散を行っていたのであるが、慌てて中止のお詫びを発信した。

演出家にとって、また表現者にとってホールと言うのは単なる物理的な箱ではない。物理的・構造的にどんなに優れていても、そのホールを運営、プロデュースする人の有する芸術哲学のようなものが、そこで表現を創造する重要な要素となる。

それ故に、ことば座では「ギター文化館発・常世の国の恋物語百」として、10年間29回の公演活動をさせて頂いた。文化的閉塞感の漂う当地においては、大変なる感謝のギター文化館である。

些か厳しい言い方になったが、微力な作家ではあるが、その哲学が欠けている所では、もう表現活動はむずかしい。とは言え、良質な文化施設の貧しい当地においては、ギター文化館という施設は、大切に育てて行くことは当市民にとっては重要なことであると思う。

なお、10年間続けて来た「ギター文化館発・常世の国の恋物語百」は、劇団発足当時考えていた「ふるさと石岡発・常世の国の恋物語百」として、現在の三十六話を発展させ、百話の達成を目指したいと考えている。

今後とも皆様のあたたかいご支援宜しくお願い申し上げます。

鉄勒（てつろく）の国

打田昇三

敕勒の川

ちよくろくのかわ

陰山の下

いんざんのもと

天は穹廬に似て

てんはきゆうろににて

四野を籠蓋す

しやをろうがいす

天は蒼蒼

てんはそうそう

野は茫茫

のはぼうぼう

風吹き草低れて牛羊見る

かぜふきくさたれて

ぎゆうようあらわる

西暦五百年代にあつた中国北朝系国家・北齊の詩人「斛律金（こくりつきん）」が詠んだ遊牧民族（鉄勒・敕勒）の歌であるが、此の民族はチュルク族と呼ばれ勇猛果敢で中近東各地に王国を建てたらしい。代表的国家が十一世紀頃イラン、トルコなど各地に建国していたセルジューク王朝であるが、それとは別に西暦一二〇〇年代にチンギス・ハンの出現によって西方への移動を余儀なくされた部族がある。オスマン・ベイ（オスマン一世）に率いられた小部族であり、兵力は少ない。

頼りにして尋ねる先はセルジューク王朝と決めていたのだが、相手側に関する情報も少なく、何処に居るか分からない上に、地図も人工衛星も無い時代であるから適当に方角を定めて兎に角、半砂漠地帯を進んで行くしかなかった。

暫く行ったところで、何処の誰だかは知らないが戦いを繰り広げている集団に出会った。本来は双方から事情を聞いて行動を決めるべきだが戦闘中であるから近寄れない。部族の名は「グズ族」と言うけれども、此の時の行動判断は迅速であり戦況が不利に見える方に加勢したのである。

ところが幸運にも、加勢した側が訪ねようとしたセルジューク国の軍隊であつたから、敵は逃げ去りセルジュークからは大歓迎を受けた。オスマン・ベイ以下の戦士はセルジューク王朝の軍隊に編入され、やがてオスマン・トルコに発展する。

トルコの国旗は赤地に白で「三日月と星」を表わしている。是はオスマン・ベイが大きな戦闘の後、戦場を歩いて兵士が流した血の池に映る三日月を見ながら「此の国は兵士の血で築かれる……」と言つて国旗に決めたものと言われる。一九二二年（大正十一年）オスマン・トルコは革命により共和国となり首都をアンカラに置いた。

アンカラは歴史的都市（紀元前六千年代の地母神像などが出土）であるが、東洋と西洋の分岐点として国際的に知られるのはボスポラス海峡に面した都市イスタンブールである。其処で疑似革命騒動が発生し日本でも大きく報道された。

トルコはイスラム国家ながら、他のイスラム圏とは違う雰囲気を感じられる国である。真偽のほどは分らないが日露戦争で大ロシアに勝つた国と言うので日本最良の国民が多く、当時は子供に日本人のような名前を付けた市民も多かったと聞いている。ロシアとは仲が悪い。

私は個人的にトルコに恩がある。かなり以前のことだが、イスタンブールのホテルに大事な物を忘れて来たのである。家に着いてから気が付いて旅行社に連絡をしたところ、数日後に現地に行くツアーがあるので添乗員に持つて来させる……ということ、そのとおりに回収が出来た。翌年の正月休日にもコースは違うが、其のホテルに宿泊したのでフロントに礼をした。中東のみならず世界中が危険な現在は、その様な呑気なことが出来な

くなるであろう。忘れ物は愚行だが、地球上が平和であることを祈る日々である。

『無菌室』へ再入院

菅原茂美

なぜこういう事になったのか。少し諄（くど）いが、まず「無菌室」とは何なのか。

それは、抗がん剤投与などで、白血球が極度に減少し、免疫機能が極端に低下している人を入院・加療するための個室である。室内の空気や壁や床など、100%除菌とはいかないが、徹底して綺麗にした上で、清浄化した空気を加圧注入すれば、室内は常に陽圧で無菌状態となり、雑菌などが外部から室内に入らないように設計されている。そして看護師や家族などは、手洗い・マスクなどで極力短時間接触。そもそも外来者は、病院入り口で、面会ならその目的の名札をもらい、胸につけ、病棟フロアーに入る前に予備室のような部屋で、手洗い・マスクなど準備の上、ナースセンターに、入室許可のボタンを押す。特別の拒否理由がなければ、入室を許可される。

私の場合、自宅で何かの菌に感染し、ある朝突然、体温が40・3℃。抗がん剤投与後、2週おきの定期診察日の朝だった。早速病院に駆け付けたが、もし別の日、なかなか主治医に連絡も取れず、モタモタし、そのまま敗血症になれば、まず第一巻の終わり。幸い主治医が診察の日。更に無菌室が1室空いており、即入院という事になった。今回は3重のラッキーに恵まれた。即ち①40・3℃になった日が主治医の診察日であつた。

②無菌室が偶然にも1室空いていた。③必要なら、ICU（集中治療室）も1席空いていた。

今回私は、天は幸福と不幸を程よく分配しているように感じた。そもそも私は、今回で3度目のがんに襲われた事自体、大変な不幸であったが、今まで2度のがん（2000年、前立腺がん。14年、すい臓がん）とも筑波大の優秀なスタッフにより、見事に解決して戴いた。そして、今回3度目の悪性リンパ腫だが、現在進行形で、多分、良い方に向かっていると信じている。しかし、治療途中で出現した強烈な副作用（最初スタッフは副作用と考えていたが、後になって通常考えられない本来のがん発症）で、右目が全く見えなくなつた。眼球そのものは全く異常なし。ただし、眼球から大脳へ映像を送る神経束に炎症が起きていることまでは確実。では何が原因でその炎症が起きているのか、現在原因追求中であるが、考えられるあらゆる可能性を消去法で除去しても、未だ見つからず。最後の手段の選択で、放射線治療で良くなるか、最悪の場合、副作用で「認知症」が残る可能性があるとの事。視力回復のため認知症を覚悟するかの分かれ目。認知症にも視力回復にも程度があるだろう。悪い方が強く、良い方が弱く出た場合最悪だ。幸いにもその逆に出た場合は真にラッキー。即ち、放射線治療で視力が回復し、心配された認知症もあまり出てこない。それを期待し運を天に任せ、ゴーストを出す冒険に出るしかないだろう。そしてもう一つの副作用は、三叉神経痛である。これは頭蓋骨の内部ではなく、完璧に外部での末梢神経通である。頭頂部から右側の頭皮・顔面。更に眼窩周辺の内部など、この痛さはただものではなかった。従って本来のリン

パ腫そのものによる疼痛は何もなかったが、副作用的な痛みによくよく苦勞した。

しかし癌に関心のない方には、退屈かもしれないが、そもそも私の再入院に至った過程は、去年の11月、顎下リンパ節（本来粟粒（小豆大）が小指頭大に膨らみ、痛くも痒くもないが、毎朝の髭剃りで気になっていた）で、娘（内科専門医）に相談したら、筑波大の血液内科を紹介され、診てもらったら、いきなり、悪性リンパ腫と診断され、いわゆる血液のがん（液性腫瘍）の一種で、放つておいたら長い寿命ではないとの事。これまでの二つのがん（前立腺がん、膀胱がん）、またしても、3度目のがんとは、何たる悪運続き。しかし嘆いていてもしょうがない。これも運命。

人類という愚かな動物に対し、無暗矢鱈人口を増やす愚行に対する天罰（人口抑制対策）のほんの一部として、予先がたまたま私に向けられたという事なのであろう。世界中には私より不幸な人は、はるかに多い現実を、熱帯の途上国で、私はこの目ではつきり見てきたが、がんなどで嘆くのは贅沢というもの。良い事も悪い事も天は平等である。と解釈すれば、文明国の一個人ががんで死ぬのと、途上国の幼児が栄養失調で死ぬのと同義しみじみ納得がいく。

*

世界人口は現在73億人であるが、地球の人口収容能力は50億人と言われる。しかし、人類は現在、食糧や資源が有ろうが無かろうが、毎年8500万人も人口を増やし続けている。もう少し理性を働かし、人口抑制策を講じなければ、神様は、がんなどと言う甘つちよろいものではなく、もともとと激辛の人口抑制策を押し付けてくるかも

しれない。

読者によつては、菅原もついに脳細胞まで癌に侵され、人口増加策を『はき違え』て、人口低減策を真面目に云々し始めたぞ！ 為政者もこんなヘソ曲がり、早々に駆除しなければ、エライ事になるぞ！ 会報「風の会」の特に『呟き』の項は、菅原という反乱分子に要注意！ 日本の政情安定化のためには、好ましからぬ存在は、早速排除しなければならぬ。戦前ならこんなところであつたらう。さあ、こういう事になれば、私も大きい面をして、その辺をウロチョロできなくなる。

しかし私は世界の2%足らずの日本人口を云々しているのではない。過剰増殖した人類という奇つ怪な動物の行く末を案じ、暇にあかしての愚考である。

*

これから述べることは、いささか脱線気味ではあるが、私のがんという病を、これまでの人類が犯してきた自然界に対する超我儘に対する天罰の一種ととらえ、全人類に対し、反省の必要性を訴えたいからである。

神様がもつと乱暴者なら、人類が今まで、平気で他の動植物に対し犯してきた『絶滅行為』そのものを、倍返しで攻めて来るに違いない。人類とは、限りなく神様に近いような、あたかも神様の『課長補佐』のような厚顔ぶりで、今日まで生き延びてきたが、ウナギにしろマグロにしろ、メダカにしろフナにしろ、人間の傲慢な食欲や観賞用改良の悪趣味により、コトゴトク犠牲にされた、哀れな生き物たちなのである。犬にしたって、わずか2万年足らずの人間との関わりの中で、狼の持つ孤高の魂は引き抜かれ、主に尾ばかり振り回

す腑抜けの僕（しもべ）になり下った。しかも人の好みによりチワワからセントバーナードまで姿形をめちゃくちゃに変えられてしまった。こんな事は生物の「種の維持」を願う神の意志に甚だしく叛（そむ）くものである。

私は熱帯滞在中、関心の強かったカトレアの野生の原種を見つけた。改良された華やかな見慣れたカトレアのあでやかさに比べたら、それは見るに足るものではないが、しかし派手ではないがキラリと輝く原点の煌きをかすかに感じさせられる。そこに目をつけ改良を続けた先人の功を多と化するが、どんなことがあっても、原種まで淘汰する愚行は、差し控えねばならぬと考える。

現にアフリカ中部のマリという国で、日本の科学者たちは、イネの原種を見つけ出した。何とその原種には、イモチ病に抵抗する遺伝子が厳然と生き残っていたという。コメは人類の最も多くの人口の主食である。このイモチ病抵抗遺伝子の導入により、人類に多大の恩恵をもたらすことになった。原種の保存は絶対重要な、疎かにしてはいけない重大事項である。

聖人ぶって、大した大口を叩くな！ と、お叱りを受けるかもしれないが、私に言わせれば、人類はあまりにも速いスピードで、大脳を進化させ過ぎた。当然そこには無理を生じ、多くのトラブルを生み出した。文明の進化スピードは、もともと緩やかであるべきである。私に言わせれば、3億年この方、姿形をあまり変えずにささやかに生き続けているシーラカンスこそ、長命の典型と讃えたい。

*

私の職業は『獣医師』である。ペット相手の開

業獣医師ではなく、産業動物相手の行政獣医師であり、主として県庁及びその出先機関で、ほぼ40年間働いた。業務の内容は主として『家畜伝染病の予防及び蔓延防止対策』である。動物を飼育するという事は、多くの問題をクリアしなければならぬ。即ち俺の家畜なのだから、俺の好きなように飼育させてもらう……というわけにはいかない。ある一定月齢になれば、法で定められた伝染病の予防注射を受けなければならぬ。もし予防注射を受けないために伝染病が発生した場合、市町村単位で、移動禁止が発令され、出荷予定が延期されたり、連日消毒作業や人の出入りの制限など、大変な騒ぎとなる。更には地域から原因除去ということで、見た目には健康であるが、強制的に命令殺を発令。大量に殺処分後、埋却をしなければならぬが、埋却処分の土地がない。あつても遠距離を車で運ぶわけにはいかない。公共の土地でも、近在の住民から反対運動。豚より小さい動物ならそれでも「焼却」という手段があるが、牛や馬など、市町村の焼却炉では、100 kgほどに解体しなければ、受け付けてもらえない。もし、人畜共通伝染病の場合、ハエやら「風」やらが、病原体を撒き散らす恐れがあるので、できるだけ完璧を期すが、地域住民への説得や了解を得るのに短時間で終了しなければならぬので、必死の覚悟が必要である。沖縄の「辺野古埋め立て事件」の二の舞は、くれぐれも避けたいものである。畜産農家は、自分の家畜は「家族」同然と心得ている。それを畜主の目の前で殺処分するのは心痛極まりないことである。

ところが私は、まだ新米の頃、殺処分のため、家畜を車で運び出そうとしたら、その家のお婆さ

んが門の前で道路に寝転び、法律か何だか知らないが、どうしてもこの子連れだすというなら、まずこの私を、車で轢き殺してからにしろ……と言つてきかない。飼主である息子さんの了解は取っているのだが……。同行の役場の老練な職員の説得で、辛うじて業務遂行はできたのだが、入庁1年足らずで、辞表を叩きつけた心境であった。当時の所長は貴重な経験と思つて私にこんな難題を担当させたか、それとも、当日多数の先輩がいたのに、私一人に担当させたということは、あのバカに一丁、熱い湯を飲ましてやるか……。まあ善意にくみ取つて、熱い湯ではなく、将来のための栄養剤とでも受け止めておこう。

私の出た岩手大学は、一人前の獣医師になるためには、獣医技術の獲得は勿論であるが、誠実さをモットーに、心からユーズーに信頼される技術者になれ！と教育された。7医や8医で10医を名乗つてはいけない。卒後30年か、満50歳を過ぎ、自らも自信に満ちたなら10医を名乗つてもよい。頑固一徹のような老教授であったが、私自身その年齢に達し、老教授の言葉が、身に染みて今、強く思い出される。

獣医師の世界も多種多様。昭和34年の世界で初めて、牛の「異形悪性流行性感冒」と当初命名、のちの正式名は「イバラキ病」が本県で初めて発生した時には、世界中の科学者が集まり、大事件であった。私の入庁の年であったが、例えば宇宙人が地球に攻めてきて、最初に放った一本の矢が、たまたま日本の、茨城県のある農家の一頭の牛に当たつた……というようなもの。なぜ？どうして？を繰り返しても埒が明かない。初発というものは、真に不可解な点が多いものである。

まだ農家に耕運機はなく、一家に一頭の農耕用の牛が買われていた時代である。県南県西地方を中心に莫大な頭数が死亡した。

また伝染病の蔓延防止という仕事も、ただ事ではない。たとえ自分の家畜は健康であっても、その地域に悪性の伝染病が発生した場合、地域全体が清浄地域となるためには、1頭たりとも感染の可能性のあった動物を生かしては置けないのである。

特に狂犬病のような『人畜共通伝染病』については、よほどしつかり対策ができていない事には、いざ発生という事態に至ると、大変な事になる。戦前には多数発生したことが、人が狂犬に咬まれて、人間が狂犬病に感染した映画を見せられた事があるが、それはそれは言語に絶する惨憺たるものであった。

今、狂犬病は、日本と大洋州を除いた殆どの国々で発生している。陸続きの国々は防ぎようがないのだ。渡り鳥から見たら、人間が引いた国境線など、ナンセンスそのもの。旅行会社は、狂犬病の予防注射は、やらなくても大丈夫…などと客引きをしているが、これは、とんでもないことで、毎年、ユーラシアや南北米大陸からの帰国者に、何人かは狂犬病発生者が出現している。特に北海道では、ロシアの漁船に乗ってきた「お犬様」が、堂々と検疫の網を潜り抜け、無断上陸を果たしている。ロシアや中国では、国土が広すぎるためか、監視の目が行き届かず、確実に狂犬病の発生があるにもかかわらず、統計的掌握ができていない感がある。それ故、南北米大陸、ユーラシアでも陸続きの国々は厳重に注意が必要である。日本のような『治安と衛生』の優れた国は非常に珍しい存

在。いくら島国とはいえ、国内の狂犬病予防注射率が現在50%を割る現実には、到底容認できない。自由主義をはき違えること甚だしい。自分の権利を主張するなら、まず己の義務をしつかり果たすべきである。犬を飼うならまず予防注射を…。それでもできずに自分勝手のみを押し通すのでは、到底先進国とはいえず、治安と衛生に優れた国ともいえなくなる。

以上長々と脱線走行を続けたが、要はがんなどという病気の解釈も、永年にわたる人類の傍若無人な振る舞いに対する「天罰」とも受け取れるので、地球全体の生命が安定的に繁栄するためには、特殊な種が、利己的に調和を乱す行為は許されなという事である。

ホモ・サピエンスとは「知性人」という意味である。大型類人猿から枝分かれして700万年経過したが、当初の温厚な行動から、人口が増えるに従って、利己的に振舞うあくどさが目立ってきた。その極点は戦争や大量虐殺などである。それに歯止めが利かないようでは天罰もやむを得ない。それがどのような方法で行われるか知らないが、智慧ある人なら自ずから予知し、事前の策を講じるべきである。地球の人口収容能力50億人を遥かに超えた今日、土地や経済の縄張り争いは、一層激しくなるばかり。決して温和な未来は予測できない。国家存立の在り方、国をまとめる宗教、経済基盤の強化、これらいずれも対立は激しく、平和のための容認は決してスムーズには行われない。そして国連とやらも、事件あるごとに「声明文」は発表するが、決して実力行動には出てこない。国際法を平気で破る無法者を、何もできずに放置しっぱなしでは、まったく話にはならない。

さて、大変恩恵を受けた無菌室入院だが、正に高級ホテル並みで、厚遇この上なく、おかげさまで急速に病状回復し、早期退院に結びついたが、貧乏性ですぐその経費など考えてしまう。しかしそれはともかく、なんとしてもこの悪性リンパ腫を早々に克服し、「風の会」で存分に活動が続けていきたい。それが私の最大の目標なのである。

地域に眠る埋もれた歴史（17） 木村進

水郷潮来（二）

○ 潮来節

「潮来出島のまこもの中に あやめ咲くとはしほらしや」 光圀

水戸光圀（黄門）が元禄12年領内巡視の折りに詠んだ歌とされる。

江戸時代、水戸から江戸への荷物の運搬には涸沼を通り、一部陸路を使ってまた、霞ヶ浦北浦から水路でこの潮来を通り利根川経由で運ばれた。東北方面からもこのルートは外洋を避ける安全なルートとして賑わいました。

そのため、ここには江戸の文化も伝わり独特の文化が花開いたといわれています。この芸者遊びなどで江戸にも伝わっていた「潮来節」と呼ばれる唄があります。三味線による芸者唄などが主体であったかもしれませんが、地方の民謡となり各地の盆踊り歌などにもなっていたようです。

・潮来出島のすな真菰（まこも）、殿に刈らせて我ささぐ。さつさおせおせ

・いたこ出島のまこもの中に、あやめ咲くとはつゆしらず

・潮来出島の十二の橋を、行きつ戻りつ思案橋

そして、都々逸にも発展した。都々逸の創始者

「都々一坊扇歌」は常陸府中(石岡)で亡くなり、国分寺に墓がある。名古屋にも似た「神戸節」(こうどふし)があり、「そいつはどいつだ ドドイツド イドイ 浮世はサクサク」などの調子がおもしろかったので都々逸という名前になったとして、「都々逸発祥の地」などという碑もあるそうだが…。

もともと都々逸も「都々一」と本来は書く。これには「都で一番」という意味が込められていた。潮来節は各地の民謡に広がっているが、その代表的なものが徳島阿波踊りだともいう。

・阿波の殿様 蜂須賀様が 今に残せし阿波踊り
・巡礼お鶴の あめ菅笠に いとし涙の雨が降る
・こゝも鳴門で 未練の深み それで渦ほど気がまわる
・踊り踊らば しなよく踊れ しなのよいのを妻に持つ

日本各地の盆踊りの歌詞にこの潮来節がどこかにうたわれているものが数多くあるのは面白い。

・ここは神崎 森の下 梶をよくとれ船頭どのよ主の心と神崎の森 ナンジャモンジャで気が知れぬ (神崎神社)

・潮来出島のよれ真菰(まこも) 殿に刈らせて我捧ぐ ささぎ揃いて船に積む 船は何船宝船

船は出て行く森の影

・此処は何処だよ船頭さん 此処は神崎森の下森の下には狐棲む 棲むや白狐 我も二三度騙された (石岡市太田善光寺)

○前川の河岸

長勝寺山門から街中の旧道(5号線)をわたってそのまま脇道を進むとアヤマ園の橋のところにでる。この橋はアヤマ園の中心にある「思案橋」で橋の近くに「此のあたり 旧跡大門がし」と石碑が立っています。大門河岸はこのあたりでは少し川が深くなっているようで潮来の中心の河岸だったようです。前川の川岸には江戸時代には多くの河岸がありました。ここ大門河岸が一番下流側でここからすぐに常陸利根川に出ます。この上流の「辻」辺りには上米河岸跡もありました。

そしてこの上米河岸から大門河岸の間に津軽藩の津軽河岸、仙台伊達藩の仙台河岸などもすこしの間隔で並んでいたといえます。東北地方から江戸に荷物を運ぶ時に水戸から那珂川に入り、涸沼を経由し、そこから陸路で鉾田まで運び、再び舟で北浦を通ってこの潮来に運んでいました。

そしてここで少し大きな船に積み替えていたようです。潮来はこの荷物の詰め替え港であり、隣の牛堀などは帆かけ舟の風待ちの港として賑わったのです。このあたりは、多くの商人たちも行き来して、昔は花街としても賑やかだったのでしょう。

いろいろな人間模様がそこにはあったことでしょう。前川を少し上流に上ったところに上米河岸跡という場所があります。二十三夜尊と硯宮神社などのすぐ近くで、このあたりは「津知村(つじむら)」と言っていました。この少し北に「津知小学校」と言う名前が残されていますが、地名としては「辻」に変わっています。

郵便番号一覧表の住所から「津知」と検索すると

・兵庫県芦屋市津知町

・京都府京都市伏見区津知橋町

の2か所が出てきます。芦屋市の「津知」は国道2号線の旧西国街道から神戸港への分かれ道にあたり、一般的な辻ではあるが湊に出る分かれ道です。湊のことを昔は津といいました。一方京都伏見の「津知橋(つちばし)」についても京都と奈良を結ぶ重要街道の現国道24号線の交差点付近にあります。やはり港への分かれ道にあつたように感じます。すると潮来の津知Ⅱ辻も単なる辻ではなく、湊への分かれ道なのではないかと思えます。辻から「硯宮神社」の横から「愛友酒造」の工場前を通って前川に出ます。前川には太鼓橋がかかっていました。ここから前川アヤマ園までは約1.5kmくらいです。

○夜越川(よろこしがわ)

行方市麻生から潮来市に入って国道51号線を経ると牛堀の街に入る。この旧道沿いを潮来の街の方にすこし進んだところに「夜越川」という少し名前の気になる川が流れている。この川に白鳥が冬にはいつもいるので気になり、先日車を近くに停めて川沿いを歩いてみました。

白鳥はいつも2羽。同じハクチョウでしょうか。霞ヶ浦やその周辺には渡りでなく棲みついた白鳥もいるようです。この白鳥が冬場だけなのかどうかはわかりません。牛堀の街の通りに架かる橋(新東栄橋)には「夜越川 YOROKOSHIGAWA」

と掲げられています。名前が気になり調べて見ると、この上流側の「香澄の里」公園に近いところにあった「永山城」(大撿流の行方一族の小高幹平の子知幹が築城し、永山氏を名乗った)が、同族の島崎氏がこの川を夜に渡って攻めてきて滅ぼされたことからこの名前がついたという説明がされている。しかし、この説明はどうもしっくりしない。「夜越」を「よろこし」と読むことからすすきりしない。この夜越川(よろこしがわ)をアイヌ語(縄文語)などであつたらどういう意味になるのだろうかと考えて調べると、岩手県盛岡市に近いところに「ヨロベツ沢」という名前があつた。

この「ベツ」というのは北海道などの地名で「川」の意味のところが多いので川の意味とすると、「ヨロ」というのは「獲物のいる所」というような意味もあるようだ。では現在のこの川というところと釣場としても名がしれているようです。バス、タナゴ、鯉などだそうですね。昔の人がこの川を獲物のいる川としてあがめていたとすればヨロというのはそんな意味もあるかもしれません。

まったく別な見方をすれば、霞ヶ浦の水運が発達していた時に、帆を張った舟の風待ち港であつた牛堀と潮来の間を人々が行き来して、夜にこの川を渡つたのでついた名前かもしれません。いずれにしても川の名前は時代や川の流域によつて呼び方も変わっている場合が多いので何が正しいかはよく分かりません。舟の出るのが朝早くつたり、夕方遅かつたり：今ではこの「風待ち」を想像するのもかなり厳しいですね。

小林一茶が潮来から銚子に行くために舟に乗つたのは「卯上刻」ですから朝の5時台です。旧暦の5月ですから朝5時台も明るかつたでしょう。

○ 浄国寺と茶村の墓

潮来のアヤマ園と長勝寺の間を通る旧街道の通り沿いを少し東に進んだところに「浄国寺」という寺があります。その入り口に「宮本茶村先生之墓 入口」と書かれた石碑が立っています。潮来ではこの茶村は有名人のようです。前に延方郷校を紹介したときにすでに紹介しています。

また吉田松陰が水戸から鹿島にきて、ここ潮来の茶村を訪ねています。松陰は潮来の宮本家に泊まって翌日銚子に向かつたのです。その入口参道の正面突き当りに「浄国寺」があります。さて、ここには宮本茶村お墓があるのかと境内を探しましたが、それらしきものはありませんでした。茶村の墓は寺の西側の寺に隣接した寺の敷地外にあるようです。この寺の横に宮本家があつたそうである敷地には墓があるといひます。松陰はこの宮本家に泊まつたらしい。この寺も観音霊場だそうである。境内に古い墓が多くある。宝篋印塔がいくつもあった。

○ 珍しい大六天神

潮来のアヤマ園の脇を通つて国道50号線に出て、神栖方面から銚子に行く時に、この50号線とのT字交差点横に神社があり、この神社が「大六天神社」であると地図で知つて近くにか車を置いて少し歩いて立ち寄りしました。神社鳥居から向かつて左に「大六天神社」、右手に「水神社」と二つの神社の名前が書かれています。

大六天は第六天魔王のことで神仏習合の時代にこの魔王を祀る神社が各地につくられた。

それが明治の神仏分離令に伴つて、祭神が「面足命」などにかわり、神社の名前もその名前を変

えて行きました。そのためこのように今でも大六天神社と名前が残されているのは珍しいと言えます。

香取市の府馬の大クスの麓の窪地にあつた「久保神社」もたしか昔「大六王宮」と呼ばれていたと思います。この久保神社には神仏習合を思わせる祭りの絵が残されていて、とても印象に残っています。ここの大六天神社はどのようなのでしょうか？

もう少し詳しく調べてみました。すると、「潮来の大六天神社はこの地(大洲)の開拓の歴史」が刻まれていました。潮来の大洲にある大六天神社に置かれた碑によるとこの地の開拓と水害の記録が見えてきます。潮来のアヤマ園から東側の地区は先の東日本大震災でも液化化でかなり道路も凸凹になり地盤の悪さが目立つた。この地に昭和に建てられた「薬師寺の東関東別院・潮音寺」も液化化で大きな被害を受けました。霞ヶ浦も昔はこの辺りは水面下であつたのかもしれない。利根川の東遷で大量の土砂などで大きな洲ができ、江戸時代にはこの地を開拓して水田が広がりました。神社の境内を入つた右側にこの経緯が彫られた石碑が置かれています。そのまま紹介します。

「今より392年前(天正5年)北浦の浪逆寄洲に祖先が7軒居住し7軒島と称す。忍耐と努力を重ね新田を開拓し、水禍に嘆き苦しつた郷土の基となる寛永18年(1641年)前大洲新田として年貢を上納するに至り、天保15年(1844年)常陸国大洲村戸数60戸となる。明治9年(1876年)潮来町と合併し今日の潮来町大洲戸数84戸となる。……」(昭和47年建立)

何故か神社の歴史よりもこのようなことが書かれているとこの地の先祖の苦労が伝わってくる。

「かりかけし 田面の鶴や さとの秋 はせを」
〔明治9年建之（松尾芭蕉の鹿島紀行の中にある句：稲を刈りかけた田んぼで、鶴が餌をついばんでいる）の石碑が立てられていました。〕

芭蕉は鹿島紀行でこの辺りを通ったのかは定かでありませんが、句の持っている雰囲気は確かにこのあたりと考えられなくもありません。
境内には庚申塔など幾つもの石碑が置かれています。

この大六天は何時頃の創建かは定かではないそうだが、天保5年（1834）に再造営された棟札あり、それ以前であるという。

大六天（第六天）は仏教でいうところの仏道を妨げる魔王で、欲界を支配している最強の魔王です。他化自在天ともいわれ、人の快楽を自由に自分の快楽にしてしまう力を持つと言われています。

織田信長が第六天魔王を自称したとも言われています。天保の頃の祭神は素盞鳴命で、現在の祭神は「高御彦霊神」だそうです。どのように変わってきたかは不明。

この大六天神社は、千葉県香取郡山田町山倉の山倉大六天神社より分祀祀されたものと思われ、小泉地区の代神として祀っていたが、途中鹿島吉田神社の境内に移し、数年後に現在地に移され、昭和46年潮来有料道路新設に伴い移転新築されました。大六天神社の拝殿の右側に「水神社」が置かれていいます。寛文3年の創立と推定されています。

○ 永山金刀比羅神社

石岡から霞ヶ浦の北側を国道355号線で東にむかっていくと、行方市の旧麻生町を過ぎて、潮

来市に入るとすぐに、国道51号線と交差する。

この信号の少し手前の山の上に神社がある。この場所は永山地区でその先が牛堀地区になる。「夜越川」の由来のところで書いた「永山城」はこの山の先の方にある。国道355号線から真つ直ぐ上に急な階段が続いている。すぐ近くに車を止める場所がなくいつもは通り過ぎていた。何があるか気になり手前のコンビニの広い駐車所をお借りして車を停めた。神社への上り階段はかなり急で少し危なっかしい。右手の方にはもう少し緩やかな階段があつたが、真つ直ぐに上つてみた。しばらく登ったところに鳥居があり、神社の社務所があつた。

人も常駐されている。顔を合わせたので「こんにちは」と挨拶をして神社拝殿へ更に階段を上った。

手水舎には牛堀の人の奉納書きがある。ということは永山と牛堀地区の両方の神社なのか。

この神社も海運の守り神「金刀比羅神社」であつた。裏に回って見るとこの本殿はかなり立派なものだ。彫刻も目を見張るものがあつた。本殿の隣りに「元之宮」が祀られていた。この神社の由緒書きからは安永7年（1778）春の創建と思われる。

昔は霞ヶ浦沿岸、鹿島灘、銚子の方からも参拝者がたくさんあつたようだ。金毘羅さん（金刀比羅さん）は当時漁業関係者の信仰がかなり厚かつたようだ。境内に少し古びた灯籠や狛犬などが置かれていた。常夜燈の台座の部分に彫られた文様は「波乗りうさぎ」でした。波間から月が昇ったり、波のある水面に月が写ると、月のウサギが波間に飛び跳ねているように見えるからこんな文様が江戸

時代に流行りました。因幡の白兔でも、鰯の背中を飛び移つて兎が飛び跳ねているのもきつと同じような想像だったのではないかと思います。

この神社の鳥居からも霞ヶ浦が見渡せます。昔はきつとすぐ近くまで水が来ており、湊もあつたのだと思います。霞ヶ浦の水運が発達していた時はここから大小さまざまな帆を張つた舟が行き来していたでしょう。（続く）

じいちゃんとはあちゃん にわやまゆみこ

じいちゃんとはあちゃんに合わせない。まわりの迷惑になるくらい。それでも自分のやりたいように行動する。というよりも、そのようにできているからそれしかできない。

そんなじいちゃんに唯一くつついていたのが、ばあちゃんだ。二十歳を過ぎてまもなく嫁になつた。金婚式なんか十六年も前におわっている。おなかめ納豆みたいな顔してお花が大好き。わたしにはとてもやさしかった。

じいちゃんとはあちゃんはいつも一緒だった。畑をやるときもごはんを食べるときも、昼寝をするときも、買い物に行くときも、ラーメンを食べに行くときも。じいちゃんの運転する車にばあちゃんも乗つかれている。まだばあちゃんがドアを開けていないのに構わず発車する。お気に入りのセイミヤで、自分の欲しいものをみつけたら「なにチンタラしてんだつくぞ！」とものの数秒で店を出る。それくらいじいちゃんとはあちゃんに合気短いい。

県指定文化財（15）

兼平智恵子

そんなじいちゃんのくせに、あの世にだけはなかなかいこうとしない。迎えがこない…。ばあちゃんに早く会いたい。いつも泣いている。ばあちゃんが死にかけたときじいちゃんに短い手紙を書いた。『先に逝くからあとからゆっくりきてね』

女家族には、ばあちゃんはやつと一人でせいせいしているのだからまだ逝かなくていいわよ。と皮肉だかなんだかを言われているじいちゃん。

はやくあの世にいきたいと言いつつ、毎日体調を整える薬をかかさず飲んでる。私もそんなじいちゃんをみているものだから、長生きなんてするもんじゃないなあ。と思っているのに、喉がちよつと痛くなっただけで「いかん！ これは風邪の前兆だ！」と誰よりも素早く病院へ走り、手洗い、うがいを徹底し体調管理に勤しむ。

ああ、なんたる矛盾。疲れた疲れた、もう十分だ。というならその毎日飲んでいる薬を止めたらいいし、人に会うのもやめて治療などしなければよい。自分からドロップアウトするのは簡単だ。それなのに、苦しまずに幸せな気分のままピンコロと逝きたいんだ。というのはやっぱり人間の憧れかなにかなんだろうか。

まあ、そんな滑稽な人間の姿が愛おしくもある近頃。ちよつとはオトナになってきたのか。体が頑丈なのはおそろい。年差は五十八歳。

じいちゃんも私も元気に息を吸っている。さて。何をしようか。お盆はおばあちゃんの誕生日。



平成二九年三月、工事完了予定の新石岡駅前、工事の為の交通規制や機器類で注意が必要です。上下左右確認しながら、エスカレーターで二階の改札口へ。

最初に目に付くのが、東西自由通路のガラス面にステンドグラス四枚が掲げられてあります。日本を代表するきりえ作家、滝平二郎さんの春夏秋冬を描いた作品です。

滝平さんは一九二一（大正十）年、茨城県新治郡玉川村（現小美玉市玉里地区）に生まれ、幼少の頃から絵が好きでクレヨンを握ると決まって描くのは目の前に広がる筑波の風景。画用紙の手前に広々とした霞ヶ浦を、その湖面には小舟を浮かべ、遠く筑波山の端に夕日が沈む光景を繰り返し描いていたといえます。

霞ヶ浦、筑波山、そして富士山の遠景で育った私は、滝平さんの世界に郷愁と喜びと、描かれて

い大人と子供の表情。前景と背景の自然。色彩豊かな滝平作品にドキドキしながら見入る。

茨城県立石岡農業学校（現石岡第一高等学校）在学中に、日本漫画研究会の漫画講義録を入手し、これが最初の絵の教科書となる。同校卒業。

一九四〇年頃から木版画を始める。本格的にきりえに取り組んだのは一九七〇年朝日新聞日曜版での連載が契機だったそうです。

石岡駅の東西自由通路のガラス面には、春「つくしんぼ」、夏「バスが行く」、秋「赤トンボ」、冬「雪がつせん」と題して、展示されています。それぞれの作品に滝平さんのエピソードが添えら

れています。このエピソードの紹介は次回にいたします。

本題の県指定文化財の紹介にはいります。

○瓦塚 史跡

指定、昭和一二、七、十六

所在地 石岡市部原

この遺跡は奈良時代、聖武天皇の詔によって常陸国の国府に国分寺、国分尼寺等建立した際、その屋根にふく瓦類を製造した窯跡です。昭和四三年隣接している山林を開墾中に七基の窯跡が発見されました。そこで緊急の発掘調査を行った結果、窯の構造は粘土質の地盤をくり抜いて作られた「地下式有段登窯」と判明しました。

燃焼部と焼成部の区別が極めて明瞭で焼成部内は五段に造成されており、布目瓦などの多くの古代の瓦類が出土しました。この保存状態の良さから古代の窯跡としては、日本有数のものであると評価を受けていました。

その後、平成一九年度から断続的に調査してきた結果、古墳時代の須恵器窯一基、奈良・平安時代の窯跡三四基、製鉄炉一基を検出するなど大きな成果を上げる事ができ、瓦塚窯跡は八世紀前葉から十世紀ころまで操業されていたことが分かりました。

八世紀前葉：国庁・茨城廃寺の建設、小規模ながら瓦の生産開始。

八世紀中葉：国分寺・国分尼寺が建設され、国庁も瓦葺きになる。かすみがうら市の松山瓦窯が大規模に操業し、瓦塚窯跡は補佐役なる。

八世紀後葉：この頃国分寺完成か。武器の生産を中心に鹿の子C遺跡全盛。再び国分寺の瓦の范

が戻り瓦生産の中心になる。

九世紀：地震で国分寺倒壊するなど国分寺の維持管理が行われる。鹿の子C遺跡農具の生産増える。窯四基が一セットになって操業が安定化する。国庁が荘厳化。

十世紀：個人による仏教の信仰が進む。国分寺は維持管理されなくなる。北側の一群が操業され、その後瓦の生産が終了する。

十世紀になると国庁はわずかに正殿と前殿を残し衰退していきます。国の安寧を願うためものであった仏教も貴族が個人的に信仰するようになる。国分寺も衰退し、この時期に合わせるかのように瓦塚窯跡も操業を終了する。このように瓦塚窯跡の窯の変遷は国府の動向と一致し、国分寺の創建や維持管理などの国の政策が反映されていると言え、国司が主体となって瓦が焼かれていたということがわかるそうです。

参考資料 滝平二郎きりえ名作集 夏・秋・冬・春篇

ふるさと歴史館企画展 常陸国府と瓦塚窯跡より

・低山にひそむ数多の瓦塚窯跡

凛として雅羊ガード 智恵子

手話落語

小林幸枝

七月二十五日、手話落語の第一人者である林家とんでん平さんが、全国6000キロ落語旅で、石岡に立ち寄られ、野菜直売所・石岡そだちで独演会が行われました。

野菜の陳列台に、高座が作られ、野菜に囲まれ

ての落語会となり、とんでん平師匠も初めての経験と、大変面白がって演じて下さいました。

一週間前に、白井先生のところへ石岡でも一席伺えませんかとの連絡があり、大慌てに準備をし日本初の野菜に囲まれての落語会が実現できました。観客は、野菜陳列台の並んだ通路に簡単なベンチを作ったの落語鑑賞となりました。

急遽の落語会だったのですが、聾者の仲間たちに皆で声掛けをして、二十名近い人が集まってくれました。健聴者と聴覚障害者が半分半分で一緒に落語を楽しみ、大笑いすることなど、普段はあまり経験することが無かったのですが、素晴らしい場が出来たと喜んでいきます。

私も、師匠の前座として、万葉集や一行詩の手話舞を披露させていただきました。とんでん平師匠からは、手話でのこのような舞がある事を知ってビックリされていました。

落語会終了後、会場を提供して下さった木村様と十年間手話舞を応援してくださった前ギター館館長の木下様、白井先生と夕食をとったのですが、とんでん平師匠とは手話での会話ができたので、二人で大笑いしました。

とんでん平師匠の手話落語を見て、私も手話落語を覚えて、手話舞に生かせたらいいなと思いました。



変われば変わるものだ

伊東弓子

俺がこの家に来たのはあの暑い夏の日だった。今年で三年目になる。

いきさつは不思議なことだった。過去のことは余り考えず、一緒に暮らしてくれる人を捜して歩いていた。何か胸が騒ぐ気持ちで行った先には沢山人が集まって作業していた。俺は嬉しくてはしゃいでいたが、迷惑らしかった。大勢の中には、犬、猫に慣れない人、危害を加えられると恐れる人種がいるようだ。

「盆踊りの準備で人が一杯いるから、こっちへ来ないでね」

と、水辺へ連れてこられた。後を追う気にもならず草道を歩いていた。人の沢山いた所は、婆さんの弟の家だった。コンクリートの道は暑い。思わず水に入っていた。あおこがあるうが、臭い感じが構わない。いい気持ちだった。

「あーら、犬が泳いでるよ。こっちおいで」と、子供たちが呼んでいた。そこは、いづみ荘の近くで婆さんの妹の家も近くだった。みんな喜んでくれたが落ち着く所ではないと、察した。不思議というか、縁というか、その夜、婆さんと孫達がやってきて、かつ井を食べて帰る後をついて行ったのが、この家だ。『今夜だけよ』の話しだったが、居着いて今に至る訳だ。

お爺さんが亡くなった後で、陰気臭い雰囲気だったが、優しく言葉かけをしてくれた。俺の落ち着く場所となる所だと決めて安心している毎日だったが、自由さはなくなった。『いづみ』と呼ばれる度に、あの割烹屋を思い出す。今度連れて行くね、と言いながら一度も実行してくれてない。

あそこにはご馳走もありそうだ。それに優しいおかみさんがいる。ああ早く行ってみたいな。連れて行ってくれもしない。当てにしない積りでも、今度ね、今度ねと言われると腹が立つてくる。首輪のないの自由さ、緑の草、広い空、汚いが大きな水瓶でがぶがぶ飲んだ旨さ、二度と戻れないのだろうか。

あの頃は、孫と一緒に生活だった。姉の方は愛想笑いをするだけで俺の相手はしてくれなかった。それには訳があるようだ。韓国にいる時、犬を飼っていたそうだ。散歩させたり、洗ってやつたり、排泄物の掃除もしていたと。日本に来る時、置いて来たが、「どうしているか。誰かに飼われていたかな」と婆さんによく話している。忘れられないようだ。俺のことはいいよ、と言ってはみたが、少し怪しい気もする。弟の方は散歩もしてくれるが、俺の力を怖がるようになったりしていた。孫にまかせて婆さんは飯をくれる時だけのかかわりしかもっていない。孫の母親も仕事で精一杯の様子。それにある時、気になることを耳にした。

「私は猫が好きなのよ」

一寸、妬けるね。余計者のような存在なんじゃないか。御座成に扱われていることを感じながら日を送っていた。兄ちゃんが婆さんを怒っていることがあった。

「繋がれて自由のきかない身の犬のことをよく考えてやったらいいんじゃないかな。可哀そうなことだ。ちゃんと散歩してやんなくちゃ」

婆さんはその後、毎朝散歩に出かけてくれた。例え十分位でも嬉しかった。言葉もかけてくれた。日中は何処へ行くのか、何をしに行くのか、お忙しい事だ。又お元気で何よりとも思っている。

ある時の三々四回の出来事は、恩情を与えてくれたと思っているかもしれないがみえみえさを感じることが多かった。綱が切れそうに逃げやすかったり、綱の取り替えをする時、わざわざ放してくれたり、俺の力の強さでひっくりかえったふりをしていた事など、滑稽とも思えることだった。その揚句、何日か経って帰ってみると、「いづみ：ああ、よかった。どうしてたの。もう帰ってこないかと思った。心配してたよ」と、あちこち撫でてくれる。これは本当の気持ちかな。

孫達が引越していった。すっかり気落ちしたような婆さんをよく見る。別に婆さん一人の所為ではないが、大きな原因の一つであることには間違いない。優しさも可愛いという思いも、現代っ子の扱いが不味かったのに気がついたらしく憎気っていた。

冬の頃から三十分かけてのコースを歩いてくれた。畑の道を行ってくれる。梅が香り人の来ない藪を椿が飾ってくれる。れんぎょや花だいのんが乾ききった土の上に花びらを散らしていた。と、その一角に狸かハクビシンがミイラになって、一枚の木膚が転がっているようだ。そこに転がって体中に匂いをつけた。散歩はいい。枯草に用を済ますと必ず「かつちらかして土かけだけじゃダメよ」と、土をかけ、後始末してくれる。

時々、風の会の先生達の犬猫の話聞く。犬猫の正体を知って世話されている先生方の犬猫と、気ままな婆さんと一緒に暮らす俺と、どっちが幸せかな、と時々思う。

婆さんの気持ちが俺の方を向いて実にいい。隣りの子が二年生になって、母親は送り出さなくなった。その時間を見計らって塵出しを兼ねて散歩

に行くようになった。子供達の集まる場所も近くにある。子供達は賑やかでいい。子供達が声をかけてくれたり、道添いのお母さんが喜んでくれている。

「散歩して貰っていいね」

時々合うお爺さん二人もいつも声かけてくれる。

「この頃は、逃げ出さないのか。いづみ。逃げたい気持ちも分かるけどなあ」

と鼻興味に言ってくれた。悪い気はしない。

「そうだ、壁蝨はいないかな。いい葉あるよ」

と話しが出た。婆さんは、あら、大変とばかり、散歩もそこそこに帰って探し始めた。あらいた。あらひどかったね。とそれから毎日壁蝨とりが予定に入った。葉よりは、まず私が取ってあげると張り切っている。俺は前から痒かった。気がつかなくてごめんね、というが俺は前から気がついていて。体を見てくれなかったんじゃないか、と恨めしく思った。兎に角気持よく退治して貰っている。悪い奴だ、いづみの血をみんな吸ってしまふ。首輪の陰にいたりとか、腫れあがっているもの、小さいもの、卵みたいなもの、取って潰していたが、昔話をしてくれた。婆さんが小学校の低学年の頃のことだとか、近所に住む友達のお父さんが、遊びに来ていた時だそう。痒いと言って捕らえた蚤を噛んでしまったとか。その時の言い種が、

「俺の血を吸うなんて、この野郎。取り戻してやる」

だったそう。そして「いづみもお前の血、返して貰いなね」と婆さんは手に乗せてくれた。膨れ上がった壁蝨を俺は頂いてしまった。見つけたらいつもそのようにしている。間もなく婆さんが体中が痒くなったとか言い出した。いづみの壁蝨

がうつったんだと、全く失礼なことだ。

「掃除機をかけている様子がないのだから、家壁蝨でも住んでいるんじゃないか」

と言ってやったが、通じないだろうな。

学校へ行く子供達の声がしなかったら、夏休みに入ったそうさ。その頃からつれて行ってくれた散歩のリズムは崩れ始まった。朝早く用足したので疲れたとか、暑くなっちゃったから後でね。とか、そんな移り気な婆さんの穴埋めしてくれるかのように、この頃、夕方になると嬉しいことがある。近所のお爺さんが散歩に行ってくれるのだ。大井戸の方、文化センターの方、高浜の方へと遠くまで行ってくれる。涼しくなった道を、仲間に合ったり、夕方の情景もいい。婆さんはそれをいいことにしているのかな。

いよいよコラムとかを仕上げる日が迫っているという。時間も無い、題材も見当たらないのか、俺と婆さんの世迷言綴りのようだ。焦っても一向に進まないようだ。

人間達がよく言っているが、人の心はコロコロ変わる。全くそうだと思う。そう言っちゃあおしまいだから婆さんと俺のかかわりとしておこう。

風と戯れて

木下明男

|| 蝸 ||

退職したばかり

暇をもてあます己の姿に悲しさを感じている訳ではないのだが……



蝸に

日がな一日
もの悲し

|| 夏の田圃 ||

真夏の微睡み

激しく降りそそぐ蟬の声

トンボたちはせつせと……



蟬時雨

トンボ飛び交う

田圃かな

|| 夏日 ||

夏の日差しから遁れる想いは

活きる者にとってみなおなじ……



ギラギラに
日陰求めて
人も蝶々も

【風の談話室】

《読者投稿》

私の国府巡り「難波」 京都府精華町今井 直

「七夕」と書いて「たなばた」と読む。常識だ。それで「夕食」を「ばたしよく」と読めば、人に笑われる。どうしてなのだろう？ 恥ずかしながら私は子供の頃、こんなことばかり考えていた。「直角はなぜ九〇度なん？ ワケわからん、教えて！」などと尋ねて、大人たちをよく困らせた。世の中ほとんどが十進法で成り立っているのに、子供にとって半端な数値が理解できなかった。大人たちは口を揃えて言う。「アホか！ 昔、から直角は九〇

度に決まるとる。くだらんこと考えずにサツサと勉強せい！」学校の先生すら「うーん!?…調べておくからチョッと待っててね」と逃げた。私にはその「チョッと」がどんなに長かったことか！きちんと説明してくれないのがとても不思議だった。私の友人は、「ケ」で悩んでいる。彼は国際交流サロンで外国人に日本語を教えている。生徒たちは「霞ヶ浦」や「龍ヶ崎」の「ケ」を、なぜ「け」でなく「が」と発音するのか分からない。「あめ玉3ヶ」や「1ヶ月」のように、「こ」とか「か」と発音することもあるから、話はややこしい。文字が大きい「ケ」と小さい「け」の区別も一定しない。彼は、「関ヶ原」の「ケ」は所属を表す助詞「の」の意味で「不破関（ふわのせき）にある原」であり、「五ヶ条」は助数詞「箇」の代用だと説明したが、外国の青年たちが果たして理解してくれたかどうか…。

時代劇『忠臣蔵』の敵役である吉良上野介、なぜ「こうずけのすけ」と読むのか？ある時、私は尋ねられて、それは昔から決まっていることで常識だと、つい言ってしまった。怪訝そうなその子の表情を見て、好奇心旺盛だった私の少年の頃を思い出し、その後も長く心の片隅に引っ掛かっていた。そして三年前にやっと、その明確な答えに出合った。

上野国分寺跡「高崎市」を訪ねた時、うだるような猛暑の中、発掘調査が進んでいた。復元された金堂・塔跡の基壇や築地塀を見学してから、隣接する「上野国分寺館」「資料館」に入った。正直に言う、涼んで休みたかったのだ。見学者の少ないこのようなハコ物は肩身が狭いと、国府巡りをしているように聞かされるのに、史跡の研究や保存

と継承に対する群馬県の力の入れようには驚かされた。目を奪われたのは、縮尺1/30の精密な七重塔の模型の展示だ。吹き出る汗も忘れて見ていると、館長が冷たい麦茶を出してくれた。地元の高校で定年まで教職にあったという館長は話が面白く、気が付けばアツという間に1時間半も経っていた。興味深く説明してもらった「上野介」について、まとめると次のとおりである。

現在の群馬県と栃木県は、古代には毛野（けぬ）と呼ばれた地域だった。後に渡良瀬川をはさんで上毛野（かみつけぬ）と下毛野（しもつけぬ）に分かれたが、今も小山と前橋を結ぶJRの鉄道路線は両毛線という。和銅六年（713）に元明天皇により、地方統治の指針とするため、国ごとに『風土記』という地誌を編纂させる詔が出された。その際、地名には好ましい漢字を選ぶことが義務づけられた。「好字二字令」という。当時の先進国・唐では、長安とか洛陽・敦煌など二字からなる良い地名が多く、それに倣ったのであろう。三文字や一字の地名も無理やり二字の漢字に改められた。倭↓大和、針間↓播磨、木↓紀伊、粟↓阿波、沖↓隠岐、近淡江（ちかつあはうみ）↓近江、遠淡海↓遠海などである。それで上毛野と下毛野は、「毛」を消し「上野」「下野」としたものの、「こうずけ」「しもつけ」と、読みにその名残を留めている。

そして「介」。平忠度（ただのり）は薩摩守、羽柴筑前守、柳生但馬守、大岡越前守…。官職名がよく知られた人物はたくさんいる。大河ドラマで人気の真田昌幸は安房守だ。このような官職名の歴史をたどれば、奈良時代に作られた律令制の国司四等官「守・介・掾・目」に行きつく。平安初期からは特例で、常陸国・上総国・上野国の三国は、

国司の筆頭官である「守」には必ず親王が任じられる親王任国となった。これは、桓武・平城・嵯峨天皇と三代続いて、非常に多くの皇子・皇女がいたため、多数ある親王家を維持する財源が不足していたからである。ただ、親王は赴任せずに都に留まっていたから、現地では次官である「介」が実質的に長官であった。後世の武家政権下では、このような官職名はいわば箔づけであり、実際に支配している地域との関係はなかったという。だから吉良義央は「上野守」ではなく「上野介」なのだ。私は立川志の輔さんのように、「ガッテン」と手を叩いた次第である。館長に感謝！

好字二字令に従い、国名を改称したのは大阪にもある。泉↓和泉と津↓摂津だ。神功皇后が三韓征討にあたって、泉井上神社「和泉市府中」に戦勝を祈願したところ、一夜にして清らかで甘露な水が湧き出た。神功皇后は瑞祥と喜び、この靈水をお祀りした。以来この地を「泉」と呼ぶようになり、後に国府が置かれたという。なお、和泉国は河内国から分離独立したため、和泉国分寺は国分寺建立の詔勅が出てから約百年後に、既存の寺院を転用して誕生した。寺料は五千束と最低ランクだった。因みに寺料の最高ランクは、常陸・近江の六万束だったという。

大和川・淀川水系が大坂湾に流れ込む摂津では、大昔から水運が発達していた。住吉津（すみのえのつ）や難波津・武庫泊（むこのとまり）などの良港に恵まれた港湾都市で、古くは津国と呼ばれていたらしい。なかでも難波津は、遣隋使や遣唐使などの使節を送り出し、西国の警護にあたる防人たちが集結し出航していった水上交通の要衝だった。また外国使節の接待のための鴻臚館（こうろかん）も設

けられていた国際港であった。難波津は、現在のビジネス街・中之島のあたりにあったとされる。

難波潟 潮干のなごり 飽くまでに

人の見む子を 我し羨(ともしも)

(万葉集 卷四十五 三 大伴宿奈麻呂)

引き潮の難波潟は見飽きない美しさだったようだ。備後守である詠み手が、献上される采女を見送るときに歌である。思わず見とれてしまうほどの可憐な美少女だったのだろう。

難波津の東の隣りが上町台地で、太閤秀吉が築いた大坂城がある所といえれば分りやすい。奈良時代はこの地まで瀬戸内の波が寄せていたという。現代の高層ビルが林立する大都会の風景からは想像もつかない。標高二十数メートルほどの上町台地は、住吉大社まで南北に約十二^キに及ぶ。後に政治・経済・文化の中心となった大坂の町の原点だ。この地は「なにわ」と呼ばれ、「浪速・難波・浪花・浪華」などと書き表された。さまざまな漢字は好字二字を探る試行錯誤だったのだろうか。「浪速」は「なみはや」、「難波」は「なんば」と言われることもあり、万葉仮名では「奈尔波」と書かれた。

難波宮は『日本書紀』に記述があるが、所在地は戦後まで分からなかった。昭和三十年代になって遂に、大阪城外堀の南の法円坂で、難波宮遺跡が確認された。戦時中は帝国陸軍が用地接收していた一帯だった。山根徳太郎博士の生涯をかけた発掘調査により、難波宮跡では前期「飛鳥時代」と後期「奈良時代」の二つの宮跡が重なることが明らかにされた。山根博士は発見当時、「われ幻の大極殿を見たり」という名言を残している。

前期難波宮跡は、建物はすべて掘立柱で屋根に瓦を葺かなかった。六四五年に孝徳天皇が遷都し

た難波長柄豊碕宮(ながらとよさきのみや)がこれにあたりと考えられている。大化の改新と呼ばれる新政はこの地で行われた。ところが間もなく皇太子・中大兄皇子は、母である皇極太上天皇をはじめ要人をことごとく引き連れ、飛鳥に帰還してしまふ。傀儡で収まりきれなかった孝徳天皇との確執が原因であろう。間人(はしひと)皇后「中大兄の妹」まで連れ去られ、独り残された孝徳はやがて難波宮で死を迎える。その後も三十年ほど難波宮は存続したらしい。天武天皇が、唐にならって複数の宮都を並立させる複都制を採用し、難波宮を飛鳥宮の副都としたからだ。

奈良時代の神亀三年(726)に、聖武天皇が藤原宇合(当時33歳)を難波宮造宮の長官に任命して事業が始まり、平城京の副都とした。中国の技法である礎石建て、瓦葺屋根の宮殿が造られた。後期難波宮である。天平十六年(744)に首都と定められたが、翌年、再び平城宮へと遷され、短命な都であった。

式部卿藤原宇合卿、難波の京を改め造らしめ

らゆる時に作る歌一首

昔こそ 難波田舎と言はれけめ

今は都引き 都びにけり

(万葉集 卷三十二 藤原宇合)

摂津の場合、副都である難波京を管理し、外国使節を接待する任もあり、特別行政区として国司を置かず、都の「京職(きょうしき)」に準じて「摂津職(せつしき)」が置かれた。やがて、桓武朝の長岡京遷都に伴い、難波宮が解体され副都の実態が失われたため、延暦十二年(793)に摂津職を廃し、新たに摂津国となり国司が派遣された。

現在、遺跡の一部は「難波宮跡公園」として整

備されている。敷地内には、大極殿の基壇が石造りで復元されており、壇上からは、大阪ビジネスパークの高層ビル群をバックに、大坂城が美しく見える。阪神高速・東大阪線は、宮跡公園の北側を東西に貫いている。高速道路だから高架構造にもかかわらず、難波宮跡付近の部分だけ急勾配で平面に降りている。これは難波宮跡の遺構の保存と、宮跡公園から見える大坂城の景観を確保するために、平面案が採用されたからだという。

福岡県太宰府市の「水城(みづき)」でも、同様の事情だった。663年に白村江の戦いで大敗し、唐と新羅の逆襲に備えて大宰府を守るため、防御線となる全長1.2^キにわたり築かれた直線状の堀と土塁である。九州自動車道が水城跡「国の特別史跡」を通過する計画案が出された際、景観に配慮し代替案も検討されたが、結局、この部分だけ地面すれすれに高速道路が通っている。

大阪歴史博物館「愛称:なにわ歴博」として大阪放送会館の複合施設がある一角も、難波宮の跡地である。なにわ歴博に行けば、難波宮のことはすべて分かる。江戸東京博物館の関西版というべき施設で、中世や近代の展示も充実し、じっくり見学すればゆうに半日はかかるだろう。十階の展望室からは、眼下に難波宮跡公園、振り返れば大坂城と、大都会のど真ん中にいながら実に素晴らしい景色も楽しめる。

河内国は、現在の藤井寺・柏原(かしわら)・八尾市にまたがる地域である。允恭(いんぎょう)陵など巨大古墳も多い。飛鳥や平城京と難波を結ぶ主要路「龍田越え」が通り、古来より官道の中継地点として栄えた。また称徳女帝の寵愛を受けた弓削の道鏡の出身地である。女帝は由義宮(ゆげのみや)

を造営し、しばしば行幸した。女帝崩御の後、下野薬師寺に左遷された道鏡は、その二年後に死去し庶民として葬られたという。

発掘調査が進まず未確認の部分が多いが、特筆すべきは「竹原井頓宮跡（たけはらのいとうぐうあと）」と推定される青谷遺跡である。元正・聖武・孝謙・光仁天皇らが行幸に際して滞在したと、『続日本紀』に記述が見える。その三百メートルほど南に河内国分寺の塔跡が見つかっている。大和川を挟んで対岸の標高差約二十五メートルの高台に、およそ五十メートルの七重塔がそびえていたことになる。遠くからでも目につく華麗な七重塔の姿を、大宮人たちはいかに眺めたであろうか？残念ながら頓宮跡は、民有地で資材置き場になっており、想像たくましく想いを馳せるしかない。

※「大坂」と「大阪」は時代により使い分けています

養生日記

堀江実穂

悔やみ姫

相手にしてもらいたかった

振り向いてほしかった

注目してほしかった

それでついヤンチャナことをしてしまった

周りはビックリしてしまった

確かに注目は浴びたけれど、皆から怖がられる

存在になってしまった

大好きだった担当職員も私にすっかり疲れ果て

てしまった

好かれないと思いやったことが裏目に出てしまった

入院することになってしまった
楽しい夏の予定も全部だめになってしまった
自業自得である

反省してもしきれない

馬鹿なことをやってしまったものだ

余りに辛い時には涙も出ない

笑うこともできない

私の心は私を捨てて何処へ行ってしまったのだろう

ピョンピョコリンとポンポコリン

診察…、入院…。

誰にも連絡できずに病棟へ連れて行かれた

私は何が何だか解らなくて

入院なぞしたくはなかったのだけど

イケメンと美人の看護士さんの後について病棟へ来てしまった

不安な気持ち一杯で心臓の音が全身を震わせていた

気分は全くのパニック状態

一人病棟の椅子に座ったままにふるえていた

そこに男に人が近づいてきて名前を聞かれた

「ミ、ポリンです」

「俺はピョンピョコリン。よろしく」

ノリの良さに気持ちが少しほぐれた

「ミ、ポリンじゃなくてポンポコリンだな」

男の人はそう言った

ピョンピョコリンとポンポコリンの病室になった

堀江さんは、体調すべれず入院されたという。病室のベッドで原稿を書いて投稿くださった。統合失

調症の決定的な治療法はまだ確立されてなく、辛い日々を過ごしておられる。養生日記として短文を投稿されて二年ぐらいになるのではないだろうか。早くの回復を願うものである。

当会の、菅原兄も、癌と闘いながら、毎月欠かさず原稿を書き続けておられる。先日、お会いしたところ、原稿を書き自分を表現することは、自分の生きる大きな力になっていると話されていた。

病も人生の一つの愉快、なんてことを坊主がしたり顔で説教するが、そんな愉快は早く捨てて、色と酒の浮世で談笑し合う時が待ち遠しい事である。

《風の呟き》

着物の起源

菅原茂美

女性が女つぶりを上げる装いの重要な順位は、①髪②衣装③化粧ともいわれる。人類がいつ頃から着物を着るようになったかが、最近、科学的に明確になってきた。

人類が今日まで進化してきた歴史をたどると、アフリカで大型類人猿として、果実などを主食とした樹上生活をしていたが、気候変動で森林がサブアンナ化すると、やむなく地上に降り、4足↓3足↓ついに直立2足歩行をするようになる。700万年前の話である。樹から降りたサルは、当然、肉食獣の絶好の餌食。立ち上がって天敵をより早く発見し、短い脚で素早く逃げるより他に方法はない。一方、サルも猛獣も熱帯の強い紫外線から身を守るためには、黒や茶色の体毛でUVカット。ところが人類の祖先は、白っぽい肌と黒い体毛であり、長く早く走るためには、汗腺で水分を蒸発させ、体温を下げる必要がある。しかし体毛がそ

れを邪魔する。そこで人類の祖先は、白い地肌を黒色に遺伝子変換を起こし、体毛を失い、UVカットする高等手段を獲得した。すると水分を蒸発させる「エクリン腺」の発達により、動物よりも走力を増した。石ころや木の枝などを獲物に投げつけると、動物はエクリン腺がないため、逃げても体温上昇で、先にダウンする。人類の祖先はこうして栄養価の高い「肉」を獲得し、大脳を発達させ、体毛を失う事により大進化を遂げた。

さて、今から7万年前、現生人類の基礎となったホモ・サピエンスの一部は、数百人の単位で、アフリカを後にし、アラビヤ半島に移住した。ところがやつと1万人ほどに人口が増えた頃、インドネシアの「トバ山」が14万年前、地球上最大級の大噴火を起こし、6000年間も噴煙が地球を覆い、寒冷期となる。多くの動植物が滅亡。人類の祖先も10分の1ほどに人口が減って再出発。これがボトルネック効果（遺伝子多様性減少）となり、現生人類の均一性が保たれ、進化速度を上げる原因となった。それまで熱帯で育った人類の祖先は、寒くはないので、着物のようなものを身に纏う必要はなかったが、思わぬ寒冷期を迎え、何か保温のため、身に纏うものが必要となった。

着物と虱には深い関係がある。ヒトに外寄生するシラミ（虱）は2種類ある。①ヒトシラミ（アタマシラミとコロモシラミ）とケジラミ（陰部寄生）であり、宿主特異性が強い。特にヒトシラミは、DNA解析の結果、今から14万年前、アタマシラミからコロモシラミが分岐、衣服の繊維間に生息し、吸血するようになった。このタイミンダが、丁度、トバ山噴火で、地球が寒冷化した時期と同時であり、人類の祖先も、これまで経験した

事のない寒さに耐えるため、衣服のようなものを身に纏うようになったと考えられる。以来コロモシラミは、衣類に棲みつき、世界中に蔓延し、「発疹チフス」や「回帰熱」を媒介する厄介な外寄生虫となった。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第五（一・一）

平和的な言葉では無いから余り知られていないと思うが「攻撃に勝る防御なし」と言って戦争や勝負ごとでは攻撃を仕掛けているほうが優位で守備一方の勢力が不利なことは誰でも分かる。

治承四年（一一八〇）四月に、自業自得とも言える原因で源三位頼政に恨まれ、後白河法皇の子である以仁王を盟主とする源氏や一部の僧兵に背かれた平氏は、筋違いでは有るが政府軍を私的に流用して迅速に対応し、何とか事態を收拾した。此の時に平家が敵に回したのは三井寺の僧兵など一部の勢力ではあったけれども、他の有力寺院に屯（たむろ）する僧兵軍団は、基本的には平家と一線を画す独自の勢力と見なければならぬ。

京都近郊や奈良には必要以上の寺院が有り僧兵が居る。それを恐れた平家は、京都を捨てて自分の本拠地である福原（神戸）を首都にすることを考えた。京都は護るに不利な地形と言うのが口実らしいが、そうなると福原遷都は「平家が守備態勢（弱気）」に入ったことになり、さらに将棋で言えば王将の天皇

が京都に居なくなる。そういう事態は京都市民の反発を買ったと共に、有力寺院の僧兵には「鎮護国家（国家の護り）」と言う大義名分を失わせることになってしまふ。喧嘩ばかりしている僧兵に重要な任務を与えられる筈が無いけれども、僧兵たちが勝手に、自分たちは必要だと思い込んでいるから福原遷都は平家に見え無い敵を増やすことにもなったのである。

遷都となれば国家に経済的な負担が掛かるであろうし、それなりの準備が必要になるけれども平家物語巻五はいきなり「遷都」から始まる。景気が悪くなった平家の建て直し策として、思い付きで強引に早急に計画されたいらしい。本文にも書かれているが引越しは合戦直後の治承四年六月早々に行われた。伝えられる記録から当時の慌ただしい出来事を追ってみると次のようになる。

・治承四年二月二十一日 二十歳の高倉天皇は三歳の皇太子（安徳天皇）に皇位を譲った（平清盛の圧力で譲位させられた）

・同年四月九日 源三位頼政らが以仁王を奉じて平家討伐の兵を挙げた（同時に諸国源氏には平氏追討の命令が配られた）

・四月二十二日 安徳天皇の即位式

・五月 十五日 敗れた以仁王らが処罰された

・五月二十一日 平家軍勢が三井寺園城寺を攻撃

・五月二十三日 奈良興福寺が三井寺を救援

・五月二十六日 源氏敗北、以仁王討死

・六月 二日 平清盛、福原遷都を敢行：

そして治承四年八月十七日には、遠く離れた伊豆の地で以仁王の令旨を受けた源頼朝が奮発して「平家打倒」の兵を挙げるのである。

都遷（みやこうつり）のこと

治承四年六月三日、天皇が福原（現在の神戸市兵庫区）に遷つてしまふ、というので都中が大騒ぎになっていた。天皇が行くということは一国の首都が変わるということであるから国家の大事であるが、それが平家個人の都合で大小屋の場所を替えるように簡単に決められてしまふ。国民は呆れながらも、未だ先のことで有ろうと思つていたところ急に六月三日と言われて驚いたのである。

それどころか予定を一日繰り上げて六月二日にそれも夜逃げをするように午前六時には宮殿に送迎車が横付けされた。尤も当時は電灯が無い時代であるから夜明けと共に活動を開始したらしい。送迎車と言つても天皇は未だ三歳なので準備するのは乳母車でも良いのだが、立派な輿が充てられ幼帝は政治的な事情を知らないから何事も無いように遠足気分です準備された輿に乗った。通常は幼帝の場合には母后が同席する例であるが、今回はどういう事情なのか守役である大納言時忠の北の方師の典侍（そつてんじ）が同乗された。

中宮（天皇の生母・徳子）、一院（後白河法皇）、上皇（高倉天皇）が後に続き、摂政の藤原基通を始めとして太政大臣以下の公卿・殿上人は我も我もと行列に従つた。但し当時は太政大臣が欠官であつたらしい。兎に角、平清盛の思い付きで実施された遷都であるが、国家の行事になるから無駄な行列を連ねて翌日には福原に着いた。

天皇にも国民にも全く関わりが無く、平家の都合だけで行われた遷都であるから御所も刑務所も未だ出来ていない。取り敢えずは池の中納言頼盛（清盛の異母弟）の別荘が一番立派な家であつたから其処に天皇を入れて「皇居」とした。翌四日には家を提供し

た褒美として平頼盛は正二位を与えられた。その為頼盛の官位は摂政関白家の九条殿（右大臣・藤原兼実の子である右大将・藤原能通を越えてしまつた。九条家のように摂政関白になれる家柄の者が、平家のような何処の馬の骨だか分らない家系の者に位階を越えられる例は是が初めてであつた―原本には其の様に書いてあるが、藤原氏でも麦藁氏でも大元は何処から湧いてきたか分からない昆虫程度の家系だつたのであろうから「名門」などと言う必要は無い。

憎まれ口はさて置き、後白河法皇に対する清盛の扱いはと言えば、長期間も鳥羽殿に幽閉していたのを思い直して、ようやく都へ呼び戻したのであつたが、以仁王と源三位頼政の事件で再び警戒心を増した清盛は、福原遷都に法皇を同行させてから改めて牢屋を造り直し四方を板で塞いで僅かな出入り口を付けただけの場所に幽閉し直した。

守護役として、九州出身の原田大夫種直という武士が監視役も兼ねて付いたから、気安く誰でもが面会をすることも成らず、地方の子供までが「牢屋の御所」と呼ぶような有り様であつた。聞くさえも恐ろしく忌々（いまいましい）しいことである。

法皇も諦めて「今は政治に関わろうなどという気は全く無い。出来れば何処かの山寺に籠つて修行に努めたい」と思うだけである」と嘆かれるばかりであつた。此の事からしても平家の悪業は此処に極まつたと言ふべきである。

人々は言う。「去る安元年間以来（平家は）多くの高官や公卿などを或いは流し、或いは殺してしまつた。さらに関白さへも流罪にして自分の婿を後釜に据え、法皇を幽閉し、高倉宮の命を奪い、悪行の限りを尽くして、残るところは此の遷都であつて其れを此の様に実行したのか！」と。

この後は平家が強行した「福原遷都」と、それ以前に行われた「遷都」との違いを平家物語は強調しているようである。平安遷都以来、四〇〇年に近い歳月は「王城の地」として京都を不動のものにした。それを、平家の都合だけで動かしたのであるから苦情が出るのは当然である。

人類が宇宙に行く現代には合わない話であるが平家物語原本は語る。そもそも都移り（遷都）は前例が無かつた訳では無い。先ず神武天皇は此の国土を治めた第五代の神（天照大神―天忍穗耳尊―瓊杵尊―彦火々出見尊―鸕鷀草葺不合尊）の第四皇子であり、母親は玉依姫という海神（海洋民族）の娘である。十二代に亘る神様の世代の後を継いで、ようやく人間の代、百王の帝祖になつた神武天皇は辛酉の年（かのとりのとし）日向国宮崎で皇位を継いだ。辛酉の年と言つても六十年に一度有るのだから、何時の事か正確には分からないが、昭和二十年まで嘘で国民に教えていた千年単位のようなことは無い筈である。

即位してから五十九年経つて（寿命が短かつた古代の人は生きていないとは思ふが、己未（つちのとひつじ）年の十月に神武天皇は東方を目指して冒険の旅に出た。やがて豊葦原中津国に留まり、其処を勝手に大和国と名付け畝傍（うねび）山に都を開き橿原の地に王宮を建てた。

それ以来、代々の帝王が都を他国、他の地に移したことは三十回を越し四十回に及んだが、神武天皇から景行天皇までの十二代は大和国の各郡内に都を置いて他国には行かなかつた。第十三代の成務天皇は即位元年に近江国に移り志賀（滋賀）に都を建て、次の仲哀天皇は長門国の豊良郡を都にした。天皇は其処で他界したから神功皇后が治世を受けて薩南諸島や朝鮮半島の諸国を攻めた。

戦いに勝って凱旋帰国する途中に筑前国（福岡）で皇子を生んだから、其処が宇美宮と名付けられたのである。生まれた子が八幡宮の主神とされる應神天皇である。其の後、神功皇后は大和国に移り磐余稚桜（いわれわかざくら＝大和櫻井）の宮に居た。應神天皇は同じ国の輕島明宮（かるしまのあきらのみや）に住み、仁徳天皇は摂津難波（せつなみのなみ）に移って高津宮（大阪城近辺）を宮殿とした。履中天皇の二年に大和に戻り、反正天皇元年には河内柴垣（大阪府松原）に、允恭天皇四十二年にはまた大和国に戻って飛鳥（あすか）に住んだ。そして雄略天皇二十一年に大和国泊瀬朝倉に宮殿を造ったが継体天皇五年には山城国綴喜（つぎ）に移って十二年、今度は京都大原に引つ越しをした。宣化天皇元年には又、大和に帰って飛鳥近くの檜隈入野（飛鳥近辺）に居た。

孝徳天皇時代になって、ようやく実在性が濃くなり大化元年に大阪中央区に豊崎宮という中国風の宮殿を造った。そして斎明天帝二年（西暦六五六年頃）に大和国に帰ってきて飛鳥付近の岡本宮に本格的な宮殿を建てた。この女帝は建築工事が好きで、やたらと国家予算を浪費したことで知られている。（平家物語には、そういうことは書いてない）次の天智天皇は治世六年に近江国に移り、大津宮に居た。天武天皇は元年に大和に戻って飛鳥の岡本の南に住んだ。是を清見原と言う。持統天皇と文武天皇は奈良の藤原（橿原市）に居り、元明天皇から光仁天皇まで七代は奈良の都に住んでいた。（平城京のことである）

章段の題名が「都遷」であるから仕方が無いが遷都の話が長々と続く。平城京に都を定めるまでの大和朝廷は「天皇制」が未だ安定しない時代のことであるから借家住まいを転々としていただけのことで特記すべき内容でも無い。

そうした時代を経て、桓武天皇の延暦二年（七八四）十月二日には、奈良春日の里から山城国長岡（現在の京都府向日）に移って十年目の正月に大納言・藤原小黒丸（北家・房前の孫）、参議・左大弁（参議の下、此の場合は兼職）紀古佐美、大僧都玄慶（東大寺の高僧）らを派遣して山城国宇多村の地形を視察させた（遷都を前提として）

小黒丸らは「此の地を見ますに四神が相応しており、帝都に適した地と存じます」と答申した。

是は、天の四方に在るとされる星の宿りに地形が合致するということで、科学的根拠は全く無いが東に流れが在るのが「青龍」、西に大道があるのが「白虎」、南に池や沼などがある「朱雀」、そして北側の高い山が玄武と言って、それに合う場所を「四神相應の地」と言ったのである。

そこで洛北の愛宕に祀ってあつた加茂大明神に申請して（本来は所轄の官庁に申請することであるが）延暦十三年十二月二十一日に長岡京から京都に都を移して以来、天皇（桓武天皇から安徳天皇まで）は三十二代、歳月で言えば三百八十余年の春秋を過ごしたのである。

桓武天皇は「昔から代々の天皇は、国内の各所に多くの都を置かれたけれども、この様な優れた場所はない」とまで言われて此の地に執着されたのである。その為に大臣、公卿、学問・芸術に優れた多くの者たちに命じて都が永久に栄えるようにと、土で三メートル近い人形を造り、それに鉄の鎧・兜を着せ鉄の弓矢を持たせて東山の峰に西向きに埋めさせた。

その上で「もし末代に此の都を他所に移すようなことが有れば守護神となって阻止して欲しい」と祈願をされたのである。その為に天下の大事が起こりそうな時には此の塚が必ず鳴動する。將軍塚として

今も（平家時代も）現存するのである。

言うまでもなく桓武天皇は平家の始祖である。とりわけて、此の都に「平安京」と名付け何事も平安にと願われたのであるから、誰よりも平家が崇拜すべき都なのである。その様に平家始祖の天皇が造られた都を、重大な理由も無く他国他所に移そうとするのは何と浅ましいことであらうか。

かつて嵯峨天皇時代に、先帝の平城（へいせい）上皇が藤原薬子（愛人）にそそのかされて世の中を乱したときに（藤原薬子の乱、八一〇年）都を

他所に移そうとしたけれども、大臣、公卿から諸国の国民まで反対運動を展開したので沙汰止みになった。一天万乗の君（二万台の戦車を動かす力の有る者＝天子）でも移すことが出来なかった都を入道相国（清盛）が臣下の身で他に移したのであるからは恐ろしいことである。

思えば旧都（京都）は素晴らしい都であつた。帝都を護る鎮守の神々は四方に光を和らげ、靈驗あらたかな寺院の屋根は都の各所に瓦の列を並べ万民が穏やかに暮らしていた。道は山城、大和、河内、和泉、摂津の近畿五か国と東海、東山、北陸、山陽、山陰、南海、西海の七道に通じていた。（このうち、東海道は京都から常陸国府まで）

然しながら首都で無くなつてからは、辻々を掘で仕切つて車などが容易に往来出来ないようになり偶に通る者も小さな車で狭い道を行くようになってしまった。軒を連ねていた大通りも寂れた。

何しろ都が福原に替わってしまったので多くの人たちが移転して京都が寂れた、ということであろう。僅かな間に花の都と謳われた京都は田舎の村になつてしまったのである。誰の仕業か分らぬが内裏の跡の柱に次のような歌が書かれていた。

「ももとせを四かえりまでに過ぎ来しに乙城の里の荒れや果てなん」(四百年も栄えた京都が、今になってこの様に寂れるとは…悲しい)

「咲き出づる花の都を振り棄てて風吹く原のすえぞあやふき」(名前は福原でも、繁栄していた京の都を捨ててきた平家の未来は危ない)

治承四年六月九日、新都造営の仕事始めとして総監督に大納言兼左大将(左近衛大将、従三位)の徳大寺(藤原実定と参議兼左近衛中将の土御門(村上源氏)通親が任命された。工事の責任者(奉行)を命じられた蔵人左少弁(天皇側近で太政官の監察官を兼ねる)藤原行隆が多くの役人たちを引き連れて現場に向かった。此の人物は平清盛の推薦で不遇の身から拔擢されたことが巻三の「行隆之沙汰」に出ている。

通常の場合、引越しをする際には事前に綿密な調査をし、特に移転先は其の日から其処に住む訳であるから交通の便、最寄駅、商店街、環境などを確認して置くのが当然であると思うのだが、平家は余程、慌てたよう新都建設の予定地に計画書で示された区割りをしたところ、京都に擬した一条から九条までの場所が五条分の用地しか無かった。担当役人が慌てて偉い人たちに「くじよう」を言ってもどうにもならない。政府の高官たちは神戸を諦めて加古川か明石に行く先を変えるほかはあるまい、などと対策会議を開いてみたが具体的な名案が浮かぶ筈もなかった。

既に京都を捨ててきたのであるから、戻る訳にもゆかず、新都に用地が足りないとなれば身を浮き雲の様な思いに晒される者が多い。官舎に入れない者は自分で家を建てる他は無いのであるから金も暇も掛かる。全ては悪夢を見たように呆然としているばかりであった。そうした中で総監督の一人である土

御門中將が「中国(長安城)では三条の広い道を縦横に通して十二か所の通用門を通していると聞くから、五条まであれば都として内裏を建てることは可能なのではないか?取り敢えずは天皇の為に仮の内裏を立てよう」と発言したので、五条大納言藤原邦綱に周防国(山口県)を与え、その収入を以て内裏築造の費用に充てるように平清盛が指示をした。

この五条大納言国綱というのは巻三の「御産」に登場して、安徳天皇が誕生した際に平家一門でも無いのに御祝に馬二頭を献上し、都の人たちに場違いのような印象を与えた人物である。普段から金持ちで知られていたらしい。今回の内裏築造任務も其れを見込まれたらしいのだが、この国綱卿は大福長者(大金持ち)であつたから内裏を造り出すことは容易であろうが、それ以外の国家の損失及び国民の迷惑・わずらいはどれほどのものであつたことか:当面の行事として新帝即位の儀式なども行わずに遷都などをして何の意義があるのか?何となく不安な時代に遷都や内裏築造などはもつてのほかの暴挙である。

昔の賢明な天皇の時代には内裏に十分な茅葺もせず、軒(のき)も整えず、民の竈(かまど)の煙が立たぬ時は大幅減税をしたり、常に国民の暮らしに配慮していたのである。中国の諺(ことわざ)に「楚帝花の台を建てて黎民荒け、秦阿房の殿を起こして天下乱る」そしていはなのうてなをたててれいみんあらけ、しんあぼうのてんをおこしててんかみだる(楚の靈王が豪華な宮殿を建てたために国民が逃亡した。秦の始皇帝が壮大な阿房宮を築いた為に天下が乱れた)と言うのがある。

一方で中国古代の英明天子は宮殿を建てるのに「茅茨切らず、采椽削らず、周車飾らず、衣服あやなりける」ばうしきらず、さいてんけけらず、しゅ

うしやかざらず、いふくあやなりける(古代中国で理想の名君と言われた堯帝は、国民の負担を考慮して宮殿の屋根を葺く茅は其の俣で用い、材木は山から切り出した原木を加工もせずに使った。皇帝が乗る船や車も飾りなどを施さず粗末なものであつた)——そう言う時代もあつたのだが、平家は国家的な理由も無く都を福原に移して莫大な予算を無駄にした。それを風刺した当時の人たちは、唐の太宗が長安に驪山宮(りさんきゅう別荘)を造つたけれども国民のことを考えて遂に臨幸することが無かつた事と(平家が福原に遷都したことは)大きな相違である、と言いつつ合つた。

月見(つきみ)のこと

此のどかな題名の章段は、平家一門の話では無くて平家が強行した「福原遷都」に対する無言の抵抗のような内容である。平家物語の作者は「都遷」の章段で書き足りなかつた京都市民の憤懣を補足するつもりで此の章段を書いたのであるが題名が「月見」で出て来た役者が優雅な為に、短いけれども文学的には情緒深い作品になつた。

治承四年六月九日、新都(福原)の事始めとして十日に宮殿の上棟式、十一月十三日には安徳天皇の新宮殿遷幸が決められた。見捨てられた京都は廃れ、今の都として福原は繁盛する:是は仕方の無いことで、古い感覚で言えば呆れるようなことばかりでは有つたが、夏も過ぎて既に秋も半ばに差ししかつてきた。秋と言えば名月の季節であるから、新都・福原に來た連中は「月の名所」を探して源氏物語に所縁のある須磨・明石の浦を伝い歩き、淡路の海を越え、絵島(淡路北端)の磯の月を見て回つた。また白

浜、吹上、和歌の浦など紀州を巡る者も居れば住吉、難波、高砂、尾上と京阪神の月を愛でた者も居る。そうした中で、京都に残った人たちは伏見（巨椋）^{おぐら}或いは嵯峨・広沢池など古来の名所の月を見た。

平家から新都造営の総監督を命じられた大納言兼左大将の徳大寺実定は、その立場から月であるうが太陽であろうが新首都・福原のもので間に合わせなければならぬのだが、どうしても京都のことが忘れられずに古き都の月を恋して八月十日には神戸から京都にやって来た。言わば捨てられた都の京都は何事もすっかり変り果ててしまったが稀に以前の侘で残る屋敷も門前の雑草は伸び放題、かつては手入れされていた庭もヨモギやススキが生い茂って野鳥の巣と化していた。色とりどりの雑草が、それでも可憐な花を咲かせている。

京都人の大納言にとって、思い出の場所として残るのは近衛河原に在る宮殿の別棟だけであつた

此处で登場するのは、平家が決めた遷都に従わず京都に留まった皇室の、それも皇后であつた女性である。其の名を藤原多子という。平家物語巻第一「二代の后」の主人公であるから、名前のとおり御存じの方も多いと思う。実は平家が主導した暴挙とも言うべき「福原遷都」で、心成らずも大役の新都造営責任者を押し付けられた徳大寺大納言こと藤原実定は多子皇后の実兄に当る。

驚くほどに変わり果てた旧都に落胆した大納言は、少しでも京都の面影が残る場所を尋ねようと近衛河原の御所別邸を訪問したのである。大納言であるから何人かの警護や随員が付いていて、先ずその家来に御所の門を叩かせると、女性の声で「誰ですか？ 草も茂って、その露を払う者も居ない（放って置かれて荒れ果てた）この場所を訪ねる者も居ないのに、

戸を叩くのは…」と不審者を咎（とが）めるような声がした。「福原から大將殿が来られました」と答えると「大門は鍵を掛けられていますので東側の通用門からお入り下さい」と言う。四代前の皇后でも平家系では無かったから粗末にされていたのであろうか。言われる俚に大將も東の通用門をくぐって御所内に入った。

旧都に取り残されたような五代前の皇后は時間だけは持て余す程あるから、日当りの好い南側の格子戸を開けさせて、琵琶のお稽古をしていた。其処に徳大寺大納言が現れたから「是は夢か！」とばかりに驚いて「是へ是へ」と招き入れた。

源氏物語の宇治の巻には、光源氏の弟である八の宮の娘が、秋の名残を惜しみ琵琶を奏して夜もすがら、邪年を払い心澄ませて居たところに有明の月が出たので、思わず月光の美しさに心打たれ、

撥（ばち）にて（月を）招かれた（という場面）があるが、皇后が大納言に会われた心境も、其れに似たものであつたろう。

その場所には待宵の小侍従という女房が仕えていた。なぜ待宵と言うのか：どうでも良いのだが、その訳は、或る時に御所内で「待つ宵と、帰る明け方と、いずれが哀れを誘うであろうか？」と言うクダラナイ質問が多分、当時の天皇から発せられた。それに対して小侍従が「待つ宵の更けゆく鐘の声聞かば帰る朝（あした）の鳥はものかは」（「ものかは」^{モノカハ}比喩ものにならないほど悲しい）と詠んでお答えしたことから「待宵」と言う名で御奉公することになったのである。徳大寺の大將は、それを思い出して待宵を呼び出され、皇后と共に昔のことを懐かしく話しておられた為に、夜も更けてしまった。大將たちは（福原遷都の被害で）すっかり荒れてしまっ

た京の都を嘆き、次のように流行の歌謡（今様）を歌われたのである。

「…ふるき都に来て見れば浅茅が原とぞ荒れにける月の光は隈（くま）なくて秋風のみぞ身には沁む…」これを見事に歌い済まされたので。大宮（皇后）を初めとして御所中の女房たちが皆、涙に袖をぬらし（平家による福原遷都を）悲しまれた。時刻は既に夜明け近くになってしまったので、大將は大宮に暇乞いして福原へ戻られたのである。其の時にお供をしていた蔵人（近従）の藤原経尹（ふじわらつねた）を呼んで「待宵の侍従が、余りにも名残り惜しげな様子であつたのが気になるから其の方、京に戻って何とでも言葉を掛けて来るように」命じられた。経尹は京に走り帰って「御挨拶を申して来い、という実定卿の仰せでございます」と言ってから「物がわと君が言いけん鳥のねの今朝しもなか悲しかるらん」と詠んだ。是に対して女房は「またばこそ更けゆく鐘も物ならめ飽かぬ別れの鳥の音ぞ憂き」と答えた。

藤原経尹は、そのことを徳大寺大將に報告したところ「そういうことが有る（と、予想したから）それに対応できる経尹を差し向けたのである」と言つて、経尹の歌才に感心をされた。それから後は藤原経尹のことを、人々が「物かわの蔵人」と言うようになったのである…優雅で情緒深い此の章段から一転して次は怪しい話になる。（続く）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>